花まるだより FCだより 合併号

2026
11

Hanamaru
Group
Monthly
Newsletter



雪国スクールより



高濱コラム

花まる学習会
高濱 正伸

2026年 11月

芯にあるもの

Ridilover（リディラバ）という社会貢献系の会社を経営している安部敏樹という男がいまして、現在ではテレビやYouTubeをはじめとして注目も集めています。同様の団体や組織も、それをけん引している人物も複数知っているのですが、安部氏には確かな知性と、ちょっと経営が上手くいきかけたからといって贅沢しないとか、むやみに寄付頼みにならないなどのぶれない方針と哲学と経営力を感じ、仲良く付き合っています。二人に共通するのは一時期不良だったことで、彼は横浜で相当悪い時代があったそうです。私も10代終わり頃は、喧嘩しては流血したり、警察に連れていかれたり家庭裁判所で親が説諭されたりした時期もあり、シンパシーを感じていました。また、大学入試では立て直し、同じ大学に入学していることも、卒業後いわゆる「ちゃんとした就職をしなかった」ことも共通です（彼はマグロ漁船の船員になったりしています）。

そんな安部氏とアソビューの山野智久氏、慶応大学の中室牧子教授たちと「子どもの体験格差解消プロジェクト」を立ち上げたのが4年前でしたか。シンプルに言うと、教育格差だけは無くさなくてはならないが、二極化の進展のせいで、勉強以上に体験の格差（家族旅行に行ったことがない、新幹線に乗ったことがない、海水浴に行ったことがない等々）が深刻だ、何とかしようとの思いで4人で始めました。このプロジェクトについては、NewsPicksの動画で二回にわたり特集してもらえたので観てみてください。

さて、花まるもそのプロジェクトの体験提供側として、3年ほど小学生たちを無償で（交通費や宿泊代などの実費は寄付で補いながら）サマースクールや雪国スクールに連れて行っています。はじめは不安そうに参加しながらも満面の笑みで帰宅し、リピーターにもなってくれる姿を見ると幸せをもらえます。

そんな体験格差解消プロジェクトを推進する仲間たち十数名と、北関東のある少年院を見学しに行きました。少年院と聞くとわかっているつもりになりますが、どんなところか実態はまったく知らないのが普通ではないでしょうか。ある意味、極端な側に行ってしまった子がそこでどう過ごしているのか、興味津々でツアーに参加しました。法務省の局長さんや元法務大臣、幅広いNPO関係者、教育関係者なども参加されている企画で、丁寧な案内と率直な質疑応答があり、教室での姿や行進して移動する姿も見ることができ、住居棟の各部屋のなかも案内してもらえました。低年齢の少年が多いなかで、白眉は、一人の少年Aくんが、自分の心の歴史といまの課題、成長した部分を堂々と語ってくれた時間で、みな胸を打たれていました。私のすぐ真横にいたこともあり、一つの職業の夢を語ってくれたときには「応援するよ！」という気持ちでいっぱいになりました。ただ、院長への質疑応答でわかったのは、ここでは心から反省していても、もともと問題があった家庭に戻り、地元の不良仲間のところへ戻ると元の木阿弥で、再びこの少年院に戻ってくる率も高いそうです。

一連の見学で感じたのは、発表するAくんの後ろで愛しい人を見守る目でウンウンうなずいていた教官の姿や、全員ピシリと背筋を伸ばして授業を受ける姿に象徴されるように、ここでは先生たちを信頼し平穏な心を取り戻す子も多いという事実。そして、出院後の受け入れの仕組みがほとんど整っていないのだということ。なので、このメンバーで考えるとしたら、出たあとの受け入れの形だなということでした。

一方、最近「携帯は我々の会話を聴いている」とよく言われますが、今回も帰宅するとすぐにある動画がプッシュで送られてきて、それは少年院を出て過去を克服し有名になった方が、暴走族の子たちを路上でたしなめる

新刊情報

『育ちのよさが身につく！ おさほうクイズ図鑑』



高濱 正伸　監修
（日本図書センター）

食事・生活・交通・おでかけ・おつきあい……子どもに伝えたいおさほうをクイズ形式で楽しく学べます。おさほうは単なるルールではなく、まわりの人とよりよくかかわりながら生きていくための土台。親子で楽しみながら、あらゆる場面で一生役立つ力を育める一冊です。

『14歳、字を書けない私が「書く」喜びを手にするまで』

高濱の本棚



朝野 幸一　著
（新潮社）

学習障がいへの理解は広がりつつあるが、「彼らの困り具合の本当の感覚」はまだ十分に知られていない。本書は、書き障がいを持った当事者の中学生の告白。苦悩や傷ついた経験、よき出会いによる克服への歩みなど、当人だからこそ表明できるリアルが記されている。その筆力のすごさにも圧倒される一冊。

タカタコラム 内山ウチヤマン朝就

横浜市泉区育ちです。子どもの頃は、馬のいる家や豚を飼っている家がありました。遊びといえば、外遊び。公園で2本の木をゴールに見立ててサッカーをやっていました。実は横浜市歌をこよなく愛しています。小学校ではじめて聞いたとき、Aメロから Bメロに入ったとたんにテンポとリズムが変わることに衝撃を受けました。大人になって、「これは波を表現しているのだろうな」など新たな発見も多くありました。素敵な歌ですよ。

ものでした。そこで彼が話していたのが、10代のいまは突っ張っているだろうけれど必ずちゃんと暮らしたいと思うときが来る。暴走族や少年院出身でも成功している実業家は多いぞ、という激励でした。それはその通りで、多くは家庭に問題があって、人を支える幸福三要素（①無償の愛、②何か一つでの有能感、③人のつながり）のうち①に若干穴のある子が多いし、それゆえ少年院に入る理由にもなっているのですが、少年院での丁寧で愛情深い育成で克服すると、パンチもあるし仲間の絆も深いので、いざ仕事に邁進すると成功しやすいのかもしれません。知人で何人か当てはまる人を知っています。

一人紹介しましょう。中学の同級生のKくんです。温泉街のある故郷は昭和の時代は不良も多く、私の同級生にも少年院に入った者が数人います。そのなかでKくんは、小学校時代から隣の小学校ではワルで有名で、それは父も兄たちも全員怖いのだという「伝説」として伝わっていました。中学で出会うと、やはり喧嘩っ早いし立ち姿もワルとしてなかなか迫力がありました。ところが、彼とは中1から中3までクラス替えもあるのにずっと同じクラス。明らかに「問題児のKくんを高濱くんが面倒みてね」という意図を感じたものです。実際喧嘩もしましたが、割と早く打ち解けて私にはあまり突っかかってこなくなり、一度自宅に訪ねて来たときには、母が「だいぶワルゴロんごつしとるね（相当な不良に見えるね）」と感想を述べていました。

卒業して彼やその仲間たちが少年院に入ったと聞いたときには、ちゃんとした側しか知らない私は「ああ、やつは終わったな」と思ったものです。ところが50歳を過ぎて同窓会であった彼は、「高濱くんだけがあのときちゃんと相手してくれたもんな」と言いながら娘の写真を見せてくれました。あるお店を起こして成功し、娘はなんと国立大学の教育学部に入学したというのです。それが嬉しくて嬉しくて、娘がかわいくて仕方ない様子でした。そこでも少年院のことを率直に聞いたのですが、「良かったよ。先生たちが一生懸命やってくれたもんね」と言っていて、見識が浅かった私は驚いたものでした。そして教育者として思ったのは「ワル一家ではあったけれど、Kくんは親や兄弟の愛情には自信があったもんな。そこが立ち直る芯の力になったんだろうな」ということでした。

さて、ツアー見学から帰宅してすぐに、花まるの保護者の方数人と、Zoomで面談をおこないました。モノトーンの服を着て整列していた少年たちの印象が強烈だった目には、どの家庭もバラ色に見えました。令和のいまはお父さまとの面談、または両親での面談も増えました。あるお父さんは幼児らしい我の強さや落ち着きのなさなどをどう叱るべきかと真剣に悩んでおられました。少し心の病にかかったけれど両親の一致団結した対応で克服できた子のお父さんは「いままでを反省しました。このことがあったおかげで夫婦で助け合う経験ができました」とおっしゃっていました。ある小学1年生の女の子のお母さんは夏に体を壊されたそうなのですが、娘さんが「怒っているママより、具合の悪いママがいやだ」と言ってくれたとおっしゃっていました。

まあ悩みは続きます。いまは悩みながらもかわいいわが子も、思春期は比較のなかで劣等感をもったり、反抗や不良性がカッコよく見えるお年頃のせいだったり、さまざまな理由で迷い道に踏み込むこともあるかもしれません。人間ですから。しかし、立ち直れる子は立ち直る。その一番大きな力は「いや、私は確かに愛された」という心の芯の確信だと思います。

そういう意味で、面談されたご両親は本当に一生懸命だし真剣。親はいつも子育ては初めて。悩むものです。実の親を含む先輩に話を聞き、相談して、夫婦で話し合いながら一歩ずつ日々を歩むのですが、お父さまお母さまたちがわが子のことをこんなに真剣に心配したり悩んだりしている姿を見ていて、美しいなと感じました。そしてすべての相談を終えたあと、「肝心な愛情は確実に彼らの心の芯に注入されています。大丈夫ですよ！」と言いたくなったのでした。

必聴！
花まるの子育て講演会

詳細・お申し込みはこちら！

▶各地で開催予定です。決まり次第、HPでお知らせいたします。

関東で開催！
12/10（木）
10:30～12:00
「輝く１年生になるために、親としていまできること ～学力・規範・意欲～」
埼玉 南浦和駅 徒歩６分 埼玉会館 小ホール



関西で開催！
12/20（日）
10:30～12:00
「AIによる激変の時代、最高の子育てとは」
大阪 天満橋駅・北浜駅 徒歩５分 エルおおさか エルシアター

タカタコラム 水口しぇふ玲

札幌市の八軒という町に巨大な公務員宿舎があり、1000家庭以上が住んでいました。その中に団地山という小高い山があり、上っては滑り降りてくるスキー遊びに夢中でした。わざと道路に面した急斜面をソリで滑ったり、安全のための柵を乗り越えて滑ったり、男子ギャンググループは「やっちゃいけない」ことを嬉々としてやっていました。しかし10年前に全体が解体され町は消えてしまい、団地山も低い丘になりました。

家族みんなで花まるタイム♪

今月のレインボータイム





出題：水口 しぇふ 玲
（花まるAIS）

解答はこちら！

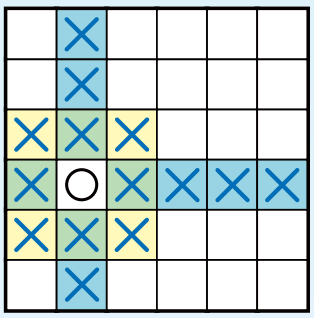
【まるっと区分け】

太い線で囲まれたそれぞれの部屋に、○が 1つずつ入ります。

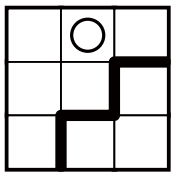
・○のまわり（上下・左右・ななめ）のマスには○を置けません。

・○があるマスの縦・横の列には、ほかの○を置けません。

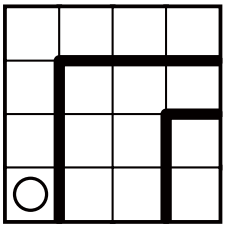
○がない部屋に、○を 1つずつかき入れよう。



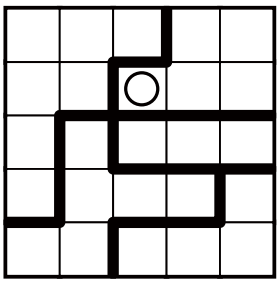
レベル1



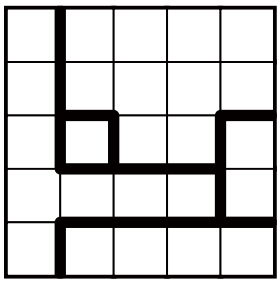
レベル10



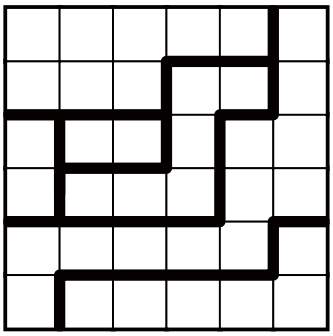
レベル20



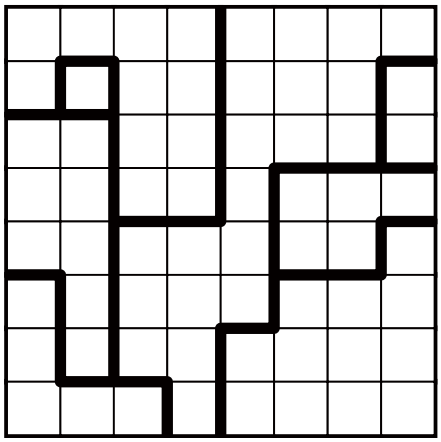
レベル30



レベル40



レベル80



タカタコラボ 相澤ぺこめぐみ

さいたま市緑区出身です。父親がサッカー部出身のサッカーファンだったのですが、母と姉はあまり興味がなく、父と 2 人で地元の浦和駒場スタジアムへはもちろん、国立競技場まで足を延ばして観戦していました。高校時代になると、埼玉スタジアムが完成して友達とよく観に行ったものです。浦和レッズも好きなのですが、青春時代の憧れはジュビロ磐田の名波選手でした。アルバイトをしていた最寄り駅のちゃんこ屋には、小野選手や坪井選手などが顔を出していました。

今どうしてる？

卒業生物語

「きみならできる」が、挑戦する背中を押してくれた



花まる学習会・スクールＦＣ卒業生のその後に迫ります。
今回は、考えることをとことん楽しみ、京都大学合格をつかんだ、伝説の卒業生にインタビュー！

榎本 良音（えのもと りょお）さん
【花まる学習会】小3～小5
【スクールＦＣ】小5～小6
＊担当教室長：柳澤隼人、仁木耕平、伊藤潤　ほか
【進路】筑波大学附属駒場中学校・高等学校→京都大学
【現在】大学生

■花まるの思い出

高濱　良音は高学年コースの直前から花まるに通いはじめた、珍しいタイプなんだよな。低学年時代は何に打ち込んでいたの？

榎本　サッカーです。同級生のメンバーがものすごく強かったので、それに感化されて頑張っていました。ハイレベルな仲間と切磋琢磨できて、本当に楽しかったです。

高　おぉ～、いい土台を築いたね。サッカーは空間認識力や瞬間的な判断力が求められるから、思考力が鍛えられるんだよ。花まるに入ったきっかけは？

榎　小学3年生の終わりぐらいに、母が花まるを見つけて連れて行ってくれました。学校の勉強はできるほうだったので、それだけでは物足りないのではと気にかけてくれたようです。学力だけでなく、人としての部分も育ててくれるところを探して、花まるにたどり着いたそうです。

高　理念に共感して来てくれたとは、嬉しいなぁ。好きだった教材はある？

榎　なぞペーが大好きでした。考え抜いて突破口を見つけることが本当に楽しくて。柳澤先生が「きみならできる」と渡してくださった、発展課題のレインボータイムにも没頭しました。

高　一筋縄では解けない問題に主体的にのめり込めるところがさすがだよ。野外体験はどうだった？

榎　5年生のとき、サマースクールで「サムライの国」へ行きました。班で最年長だった私は大将を守ることになっていたのですが、それを無視して突っ走って、すぐにやられてしまった苦い思い出があります（笑）

高　それも大切な思い出だな。

■ＦＣの思い出

高　ＦＣでの日々で心に残っていることはある？

榎　仁木先生の国語の授業がものすごくおもしろかったです。そこで紹介していただいた『増補新版 いま生きているという冒険』（新曜社）を読んで、冒険家・写真家の石川直樹さんの生き方に惹かれました。それから、石川さんのほかの本を読んだり、イベントに参加したりしました。

高　高学年期にふさわしい、いい経験をしているな。うまくいかなかったこともあった？

榎　6年生になったタイミングで、算数のシグマクラスに特例で編入することになったのですが、2回目の授業で受けた復習テストで0点をとってしまい……。伊藤先生にそのことを報告したときに「もうこんな思いは絶対にしたくない」と感じ、復習や宿題にしっかり取り組むようになりました。それからのテストは、ほとんど満点だったと思います。

高　最初に鼻っ柱を折られてよかったじゃないか。悔しさをバネに大きく成長したね。

榎　大切な経験だったと思います。6年生の勉強合宿も思い出深いです。さまざまな校舎に通う6年生と仲良くなって切磋琢磨できたのが楽しかったですし、算数のテストでは、難しい整数問題を自分だけが解いて満点をとり、最終的に一番上のクラスで1位になれたことが大きな自信になりました。

高　その成功体験は大きいな。自ら学びに向かい、難問こそ楽しんで試行錯誤する姿勢が、筑駒・開成中への合格や京大への道につながったんだね。

■これからのこと

高　これからはどうしたいの？

榎　ちょうどいま、進む道を考えているところです。

高　良音なら、どんな世界にも飛び込めるよな。これからも楽しみだよ。応援しています！

榎　ありがとうございます！



▲合格発表当日、柳澤と



▲ＦＣ時代、伊藤と



▲榎本さん　▲高濱（左）と柳澤（右）

お母さんのことや幼少期の思い出など、続きはこちら！

タカタコラム　中村ダイナミック紗季

三重県員弁郡東員町出身。四日市市や桑名市のある県北部の山間地域にあります。平成の大合併でも旧員弁郡の町で唯一独立を保った頑固な町でもありますが、自然豊かな場所でした。6月頃には員弁川の川辺で蛍の乱舞を楽しむことができましたし、2歳上の兄に「邪魔だ」と言われながらもくっつき虫で、泥んこになって遊んでいました。ローカル線には自転車を乗せられるのでとても便利でした。

＼会員限定／ 花まる野外体験

冒険の数だけ、子どもは大きくなる！



春の親子サムライ合戦







参加者の声 ▶小１女子・保護者

今回初めて親子サムライ合戦に参加しました。最初は恥ずかしくて母の後ろにぴったりくっつき、誰ともハイタッチをしなかった娘。それが合戦が始まると、毎回率先してリーダーの前に集合し、聞いた作戦を一生懸命実行しようとする姿に、成長を感じました。親も途中から本気になり、親子で真剣勝負をする楽しさや、負ける悔しさを味わいました。チームで勝つために、一人ひとりがどう動けばいいか考えることの素晴らしさも実感。高学年の子どもたちが頼もしくリーダーシップを発揮する姿も印象的でした。イベント後には「ママ、夏休みはやっぱりサムライの国がいい！」と言うほど。次回は天下統一を目指して、また参加したいです。

サマースクール







参加者の声 ▶小２女子・保護者

費用も決して安くないため参加を悩みましたが、新しいクラスに馴染むことに苦労している娘に、いろいろな場所でさまざまな子と出会う経験をさせてあげたいと思い、親子企画への参加を決めました。今回は親子で参加できたことで、ほかの親子との交流や、サマースクールの運営を実際に見ることができ、来年は安心して一人で参加させられると思いました。何より、ほかの子とのかかわりを見るなかで、娘のコミュニケーション力を信じられるようになりました。最近では、自分から大きな声で挨拶ができたり、お店の人に「お願いします」「ありがとう」と言えたりするように。楽しませるだけでなく、子どもの学びや成長につなげてくれる先生方の姿を見て、「やっぱり花まるがいい」と感じました。

次の募集は！

3月野外体験企画

募集開始：1月中旬～

対象：年長以上



星降る町へ！ かくれんぼ大作戦
（かくれんぼ・星空観賞・カレー作り）



雪国スクール
（雪遊び・スキー）



関西＆中京発！ 外遊び王国
（サムライ合戦・豚汁作り）



卒業記念の無人島
（対象：6年生）

2027年度 花まる野外体験スケジュール（予定）

春 4～5月
親子サムライ合戦
対象 年中以上の親子
募集時期 4月上旬



夏 7～8月
サマースクール
対象 年中以上
募集時期 4月下旬～5月上旬



秋 10～11月
親子サムライ合戦 無人島サバイバル
対象 年中以上の親子
募集時期 9月上旬



冬 12～1月
年末年始 野外体験
対象 年長以上
募集時期 10月初旬



春 3月
3月 野外体験
対象 年長以上
募集時期 1月中旬



タカタコラ 小島タッキー健

出身は横浜市。花まるの「あづまの幼稚園教室」がある瀬谷区で、横浜といえども自然がたくさん残っていて、田んぼや畑、森林など、緑豊かな風景が広がる地域です。小学生の頃は、この地域の少年野球チームに入り、土日は野球漬け。平日もチームの仲間と公園で野球をして遊んでいました。上瀬谷には米軍の通信施設がありましたが、2015年に返還されました。2027年には、そこで国際園芸博覧会（GREEN × EXPO 2027）が開催されます。

わが家の自由研究



Kenji 箕浦 健治（ファイヤー） Minoura

壁に貼られた、次女の覚悟

次女が、2月に看護師国家試験を受けました。私が見る限り、家にいる時間の九割は勉強していたように思います。

リビングの壁、トイレの扉の内側、お風呂の壁。暗記用の紙が、生活空間のあちこちに貼られていました。家のなかが、まるで一つの参考書のようでした。夜は遅くまで机に向かい、朝は誰よりも早く起きる。勉強する場所は決まっていて、リビングか、リビング横の私の机でした。

家族もまた、静かに生活を変えていたように思います。テレビをつける時間は少なくなり、外食も極力控えるようになりました。試験が近づくにつれ、感染症にも皆が敏感になっていきました。

試験の話題をあえて出さない日もありました。「頑張れ」と言わないことも、応援の一つなのかなと思っていました。私たちなりに、次女の邪魔をしないようにしていたつもりでした。

ある日、次女が私にぽつりと言いました。

「お父さん、一緒に勉強しよう？」

私は冗談まじりに、

「いやあ、それは無理だな」

と笑って返しました。そのときは深く考えていませんでしたが、いまになって思います。あれは、ほんの小さなSOSだったのかもしれない、と。

人の気配のある場所で勉強していたのは、集中するためだけではなかったのでしょう。ただ、そばに誰かがいてほしかったのかもしれません。

逃げない。言い訳しない。生活の中心に試験を置く。そんな姿が、次女の覚悟だったのだと思います。

いつも天真爛漫な次女ですが、試験直前、家族とのちょっとした衝突がありました。張りつめた空気のなか、長女の夫がそっと次女に寄り添い、場をやわらげてくれました。

試験が終わり、自己採点をして、不安になった次女はまた家族とぶつかりました。

そのとき、私は気づかされました。静かに見守ることと、寄り添うことは、同じではなかったのかもしれない、と。

無償の愛を注いでいるのは親だと思っていました。でも、違ったようです。私のほうが、たくさんもらっていたのだと感じました。

自立とは、反抗や挫折や依存を繰り返しながら、少しずつ形になっていきます。

あの頃の私は、「何かしてあげなければ」と思っていました。でもいま振り返ると、親にできることは、子どもの前を歩くことでも、答えを教えることでもなく、必要なときに振り返ればそこにいることなのかもしれません。

思春期を迎えた頃から、娘との距離は少しずつ変わっていきました。それでも、離れていったわけではなかったのだと思います。親子の間には、その時々にちょうどいい距離がある。いまは、そんなふうに思っています。

このときはまだ合否はわかりませんでしたが、一つだけ確かなことがあるように感じていました。壁に貼られたあの紙は、次女の覚悟の証だった。

あの日、「一緒に勉強しよう」と言った次女は、きっと弱さを見せてくれていました。私はそれを、冗談で受け流してしまいました。父親として、あのとき隣に座ることもできませんでした。けれどいまは、はっきりとわかります。私は、次女を支えていたのではなく、支えられていたのです。

家族の中心で笑い、不安を飲み込み、誰よりも静かに戦っていたのは次女でした。彼女がいつも通り頑張ってくれていたことで、私も家族も支えられていました。

もし、もう一度あの日に戻れるなら、私は何も言わずに隣に座ります。何かを教えるためでも、励ますためでもなく、ただ、娘のそばにいるために。

あのときの「一緒に勉強しよう？」は、勉強を手伝ってほしいという意味だけではなかったかもしれません。ただ、そばにいてほしかった。そんな小さな願いに、あの頃の私は気づいてあげられませんでした。

いまなら、あの言葉に「いいよ」と答えてあげたい。そして、娘が机に向かうその時間を、静かに一緒に過ごしたいと思います。そのときしか過ごせない時間を。

あの小さな「一緒に」が、どれほど大きな勇気だったのか。教えてくれたのは、ほかでもない、次女でした。

看護師の国家試験に合格した次女は、今日も元気に病院へ向かっています。

タカタコラム 尾形ぐりーん京香
香川県高松市出身。「おやつにうどん」というくらい、うどんは日常にあふれていました。中学時代はソフトテニス部だったのですが、山間部だったので、酷暑のときは仲間たちとジャージのまま川に飛び込んでずぶ濡れになって涼んでいました。一方、自転車で１時間くらい行くと街や海にも出られたので、ちょっとカッコつけた都会の匂いのする飲み物を買っては、海辺でたそがれたりする青春時代でした。



平沼 純の 旅する読書

過去？　現代？　それとも……



『絵で見るある町の歴史 タイムトラベラーと旅する12,000年』

スティーブ・ヌーン　絵
アン・ミラード　文
松沢あさか　訳
（さ・え・ら書房）

ヨーロッパの川のほとりにある、とある町を舞台に、石器時代から現代までの12,000年にわたる風景を定点観測的に描いた歴史絵本。緻密に描き込まれた各時代の風景や人々の姿が圧巻。各ページのどこかに描かれたタイムトラベラーを探したり、クイズを考えたりと、遊び心にもあふれた一冊。第48回産経児童出版文化賞大賞受賞作。



『もしも、きみのクラスに織田信長がいたら マンガとエピソードで学ぶ日本の歴史人物伝』

真山知幸　監修
（幻冬舎）

もしも歴史上の「あの偉人」が、自分の通う小学校にいたら……？　頭脳明晰で「学級会で10人の発言を聞き取れる」学級委員の聖徳太子や、問題児だが弱いものに手を差し伸べる一面も持つ織田信長など、史実をふまえた設定にクスリと笑えること間違いなし。それぞれの偉人がマンガとわかりやすい解説で紹介されていてとても読みやすい。ようこそ、楽しい「偉人小学校」へ！



『日本史の13人の怖いお母さん』

真山知幸　著
（扶桑社）

実は日本を動かしてきたのは、一見すると強そうな戦国武将などではなく、彼らも恐れた怖い怖いお母さんたち……いやいや、抜群の行動力と決断力、人を引きつける魅力をもった「パワフルウーマン」たちなんです！　北条政子に淀殿、春日局などなど、世間では「悪女」とされるお母さんたちの生きざまから、現代を生き抜くヒントを得られます。



『チーム紫式部！』

楠木誠一郎　作
酒井以　絵
（静山社）

2024年の大河ドラマ『光る君へ』でも話題。世界最古の恋愛小説といわれ、いまなお日本のみならず、世界で読みつがれている『源氏物語』がどうやって作られたのか――。知られざる（？）裏側のストーリーを描いたポップな一冊。「平安時代のSDGs」「あたしの最大瞬間初恋」「家庭教師にトライ」など章ごとのタイトルも遊び心たっぷり。ラストで非常に意外などんでん返しもあるので、ネタバレ厳禁！



『インスタ映えする戦国時代』

スエヒロ　著
（大和書房）

もしも戦国時代に、スマホがあったら？　もしもあの武将が、あのアプリを使っていたら？　そんな数々の、ぶっ飛んだ「もしも」を実現してしまった一冊がこれ！　幼少期の家康の「人質ツイート」、安土城の「築城LINEグループ」、ザビエルの「インスタ布教活動」などなど。「くだらない！」と笑いながら、いつの間にか歴史が身近になっている……かも？

読書講座

12/17（木）
10:30~12:00

～音楽で彩る聖夜の情景～
第6回　本×クリスマス
@スクールＦＣ用賀校
参加費：500円（税込）

詳細はこちら

※品切れなどの場合は図書館で探してみてください。

タカタコ 菅原がーす一忠

東京の足立区から埼玉県の八潮市・三郷市・吉川市近辺に親類がいて、転々として育ちました。どこも川の土手が近く、小学生時代に大型犬の散歩をまかされたのは良いが、力が強くて逃走されてしまい、焦りに焦って通学時刻寸前まで追いかけまわしたことがあります。これらの町は、TXの開通で発展したことが共通項です。現八潮駅のそばなど、昔はデコボコだったのですが、区画整理されきれいに変身しました。



井岡 由実（Rin）

Rinコラム

こころと頭を同時に伸ばす 幼児期の子育て

世界は変わらなくても、世界の見え方は変えられる

「それはいいねえ！」「すごいねえ！」「きれいだねえ！」「あ！　こういうふうにも見えるね！」

先日の授業で、どの人の作品に対しても、肯定的でポジティブな鑑賞の言葉を発するきょうだいがいました。

まわりの子どもたちも、その言葉に自然と引き込まれ、笑顔になっていきます。あ、いまこのふたりは、自分たちの言葉で、まわりの人を幸せにしている。私も嬉しくなりました。使う言葉が変わると、心の向きも変わっていくようです。

小学校や保育園など、さまざまな場所でワークショップや授業をするなかで、「あ、これは花まるの子どもたちの特徴だ」と感じることがあります。それは「どんな状況でも、そのなかで前向きに取り組もうとする姿勢」です。

楽しみにしていた野外活動の日に雨が降った。使いたかった材料が足りなかった……そんなとき、不平不満を言ったり、人のせいにしたりせず、「じゃあ、このなかで楽しもう」「いまあるもので、できる方法を考えようよ」と切り替えられる人。

「できない理由を探す」のではなく、「このなかでできることを探す」。「どうして無理なのか」ではなく、「どうしたらできるか」を考える。

大人でも、仕事の場でもそうですよね。この「見方を変える力」を支えているものの一つが、日々使っている言葉なのだと思います。

「いまの言葉、前向きで素敵だよ」「なんとか頑張ろうとしていること自体が、すばらしい」「ほかの人じゃなく、過去の自分と比べるんだよ」「いまの質問は、みんなのためになったね」「たくさんまちがったほうが、頭が良くなるんだったよね」「挑戦した人が、失敗から学んでいくんだよ」「自分の心を見つめて書くのが、作文だよ」……

子どもたちは、こうした言葉を受け取りながら育っていきます。

世界は変わらなくても、世界の見え方は変えられる。

与えられた状況そのものは変えられなくても、自分の見方を変えることで、その状況を楽しむことはできる。花まるでは、授業でも野外体験でも、そんな考え方を伝えつづけています。

その積み重ねは、少しずつ彼らの言葉や行動に変化を起こし、選ぶ言葉を変えていきます。やがて、自分自身が前向きになるだけでなく、「まわりの人を幸せにできる人」「一緒にいる人を前向きにできる人」となって立ちあらわれてくるのです。

心は、言葉によって伝えられます。優しい言葉には優しい心が、温かい言葉には温かい心が、そんなつもりはなくとも受け取った側にそれが育っていく。

言葉が、いつも先にあるのです。思いやりのある言葉を選びつづけることで、思いやりのある心も育っていく。反対に、乱暴な言葉を使いつづければ、その言葉に自分の心も引っ張られていきます。

世界は変わらなくても、世界の見え方は変えられる。そして、自分が選んだ一つの言葉によって、誰かの世界の見え方まで変えることがある。

今日、自分が使う言葉で、どれだけの人を幸せにできただろうか。そんなことを思いながら、私も日々、子どもたちの前に立っています。

ART × EDUCATION
Atelier for KIDs
by ARTのとびら

アーティストの視点と教育者のまなざしで
アートを通して非認知能力を伸ばします

会場　お茶の水花まるラウンジ
対象　年長～中学生
定員　25名（予定）
参加費　1名 4,400円（税込）

詳細はこちら






12/20（日）10:30~12:00
「クリスマスの宝物 BOX」
申込締切：12/2（水）19:00

1/17（日）10:30~12:00
「オリジナルカレンダー」
申込締切：12/24（木）19:00

2/14（日）10:30~12:00
「フェルト織」
申込締切：2/1（月）19:00

タカタコラム 平山ネクスト真康

名古屋市東区で育ちました。尾張藩主の徳川光友の屋敷跡に由来する「徳川園」という憩いの場があります。園内の「徳川美術館」は国宝『源氏物語絵巻』の所蔵数が日本一ですが、当時はありがたみもわからず観ていました。戦災後は緑豊かな公園となり、子ども時代には秘密基地を作れる森や球場がありましたが、日本庭園の再整備工事のために柵が立ち、思い出の遊び場が消えたのは内心残念だった記憶があります。

10年で変わった中学受験



スクールＦＣ 代表
松島伸浩

拙著『中学受験　親のかかわり方大全』（実務教育出版）を上梓してから、10年近くが経とうとしています。この10年間で、中学受験を取り巻く環境は大きく変わりました。

まず目につくのは、入試そのものの変化です。かつては、国語・算数・理科・社会の4教科で、午前中に1校を受験するというのが一般的でした。もちろんいまでも4教科入試が中心であることに変わりはありませんが、午後入試が広がり、一日に2校を受験することも珍しくなくなりました。2月1日からの三日間で、最大6回の受験を組むご家庭もあります。

受験科目も多様になりました。国語や算数の1教科入試、英語を利用した入試、複数の科目から選択できる入試など、子どもの得意分野を活かせる機会が増えています。以前は中堅校を中心に見られたこうした入試も、最近では難関校や人気校にまで広がってきました。

少子化が進むなか、学校側もさまざまな入り口を用意し、それまでなら受験してこなかった子どもたちにも門戸を広げようとしています。その意味で、中学受験は10年前よりずっと多様になったと言えます。

しかし、変わったのは「入り口」だけではありません。むしろ私がこの10年間、さまざまな私学を訪問し、先生方のお話を伺ってきて強く感じるのは、入学してからの6年間、つまり私学の「中身」が大きく変わったことです。

たとえば英語教育です。ネイティブ教員による授業、オンライン英会話、海外研修、留学制度など、多くの学校でさまざまな環境が整えられています。海外大学への進学まで視野に入れた学校もあります。

ＩＣＴ環境も大きく変わりました。一人一台の端末を持ち、授業でプレゼンテーションをしたり、グループで資料を共有したり、自分たちで調べたことをまとめて発表したりする。そんな授業風景も、いまでは珍しいものではありません。取材で在校生にインタビューすると、自分の考えを自分の言葉で語る姿に感心させられることが何度もあります。

さらに広がったのが「探究」です。先生から与えられた問いに正解するだけではなく、自分で問いを見つけ、調べ、考え、他者と議論し、最後は自分の言葉でまとめる。地域や企業、大学などと連携し、教室のなかだけでは完結しない学びに取り組む学校も増えました。

理数・ＳＴＥＡＭ教育、プログラミング、データサイエンス、グローバル教育、キャリア教育……。言葉だけを並べれば似ているように見えても、実際に学校を訪ねてみると、そこにはそれぞれの建学の精神や教育観があり、「どんな生徒を育てたいのか」という学校ごとの個性が見えてきます。

もう一つ、大きく変わったと感じるのが大学とのつながりです。これは付属校や系属校だけの話ではありません。大学教授による特別授業や大学生との交流、大学の施設や研究室を利用した研究、高校で取り組む卒業論文への支援など、中高と大学が連携して学びをつくる動きが広がっています。

背景には大学入試の変化があります。一般選抜だけでなく、総合型選抜や学校推薦型選抜で大学へ進学する生徒が増え、高校時代に何を学び、何に興味を持ち、どのような活動をしてきたのかも大学進学につながる時代になりました。そうなると、中高6年間で積む経験と、その先の大学進学を切り離して考えることはできません。

学校側も、単に「大学合格実績を上げる」というだけではなく、生徒一人ひとりが自分の興味や強みを見つけ、それを大学での学びや将来の仕事につなげるための進路指導やキャリア教育に、以前にも増して力を入れるようになっています。

ある私学の卒業式で高校3年生にインタビューしたとき、大学進学だけでなく、その先の職業について世界を視野に入れて語る姿に感動したことがあります。こう考えると、中学受験における「学校選び」の意味も変わってきたように思います。

もちろん偏差値も大切です。大学合格実績も、学校を知るための大切な情報です。しかし、それだけでは学校の価値を十分に測れなくなってきました。

「この学校で6年間過ごしたら、わが子はどんな経験ができるのだろう」「どんな先生や友達と出会うのだろう」「何に夢中になり、何を考えるようになるのだろう」「そして18歳になったとき、どんな人に育っているのだろう」

そんな視点で学校を見ることが、以前にも増して大切になっているのだと思います。

選択肢が増えたことは、必ずしも選びやすくなったことを意味しません。学校ごとの教育が多様になればなるほど、「どこが一番よい学校なのか」ではなく、「わが子にはどんな学校が合うのか」を考える必要があります。

ところで、これほど中学受験を取り巻く環境が変わってきた一方で、10年前もいまも、ほとんど変わっていないものがあります。それは、中学受験を前にした親の「迷い」です。

「中学受験をさせたほうがいいでしょうか」

これまで数えきれないほど多くの保護者から受けてきた質問です。最近のＦＣコンシェルジュでも、同じ質問をよくいただきます。変わりつづける教育環境のなかで、なぜ親の迷いは変わらないのか。次回は、そこから考えてみたいと思います。

FC NEWS

中学受験・学習相談
ＦＣコンシェルジュ

ＦＣコンシェルジュは、中学受験を見据えた進路や学び方に迷うご家庭のための個別相談です。多くのご家庭が抱える「このままでいいのか」という不安を、スクールＦＣの経験豊富な講師が一緒に整理します。お子さまの性格や状況に合わせて、「何を優先して考えるべきか」「ご家庭としてどうかかわるか」「どんな選択肢があるか」を具体的に整理し、「次にどう動くか」が見える状態をつくります。

対象：花まる学習会・算数脳ラボ会員の保護者さま
形式：オンライン（1回30分）　料金：無料

お申し込みはこちら▶

タカタコラム 中里たいよう明理

千葉県浦安市で生まれ育ち、すべての学校を浦安で卒業しました。姉と弟が病気がちだったので、母は大変だったと思います。両親には友人が多く、いろいろな知人に助けられました。思い出は海。休日に父の会社へ行くと、裏口の階段を下りたところにミニ浜辺があり、そこがきょうだいの遊び場でした。祖父が遊びに来たときに釣りに行ったのですが、釣り針が祖父の洋服にかかり、なかなか針が取れず、結局服がビリビリに破れてしまいました。

FC卒業生白書

スクールＦＣを卒業した先輩に、
学生時代の思い出、現在の仕事のことなど、
たっぷりお話しいただきました！



今月ご登場いただいたのは

窪田 雪乃（くぼた ゆきの）さん

花まる学習会（小１～小６）
▶スクールＦＣ（中１～中３）

埼玉県立伊奈学園総合高等学校を卒業後、上智大学外国語学部フランス語学科へ進学。現在は、人材会社のマーケティング担当として活躍中。

インタビュアー



中林 壮太（なかばやし そうた）

スクールＦＣ
高校受験コース責任者

■花まる・FCの思い出

――花まるにはいつから？

小学１年生から６年生まで通いました。高濱先生や松田な奈先生、中山翔太先生、水口玲先生に教わりました！

――花まるで印象に残っていることは？

「Sなぞ」です。楽しかったのですが、一番苦戦した記憶もあります。

――FCで印象に残っていることは？

もともとFCにいた子たちのレベルの高さにびっくりしました……。

――役立った勉強法はある？

FCでテストの２週間前から書いていたスケジュールシートを、高校でも続けていました。部活で帰りが遅くなることはありましたが、テスト前は「計画を立ててちゃんとやる！」というサイクルができていたので、ありがたいなと思いました。

■高校時代の思い出

――高校は、フランス語を学べる学校だったよね？

はい。中学３年生になって、私がどの高校にも興味を示さずうじうじしているとき、中林先生や大中先生が「英語が得意なんだからそういう方向に進んだら」と言ってくださって。伊奈学園は、フランス語が第一外国語だったんです。私は小学６年生までに英検準２級を取っていたので、英語に少し飽きていたのかもしれません。新しいことをしたくて、飛びつきました。

――フランス語の勉強は楽しい？

はい。英語と似ている単語が多いので、中学で英語を勉強しておいてよかったなと思いました。

――大学はどうやって決めた？

高校生のときは進路にこだわっていませんでしたが、留学したいという気持ちはありました。伊奈学園は単位制だったので、全体の半分くらいの時間はフランス語を学んでいました。「話せるのがかっこいいな」と思っていて、コミュニケーションを学べる大学を探しました。迷ったのですが、上智大学にしてよかったと思います。

――どのような点でそう思った？

フランス語だけでなく、第二主専攻というコース選択があって、ヨーロッパの歴史や言語学、アフリカ圏の研究など、「フランス語を活用して何かを学ぶ」ということをしていました。そのおかげで、「学んだことを何かに活かす」というマルチタスクの思考が身についたと思います。

■現在の仕事について

――いまの仕事は、そのときとは違った方向に進んだね。

はい。仕事でフランス語を使うことはないのですが、留学で得た価値観とつながっている気がしています。留学したとき、働くことに対する価値観が、日本とはまったく違うことに驚きました。フランスでは「人生を楽しむための一部が仕事」という捉え方なんです。日本では「労働」という言葉があるくらい、「苦」と感じている人もいる印象ですが、私は働くのがめちゃくちゃ好きだったんですよね（笑）。掛け持ちでアルバイトをしていたくらいです。でも、まわりの友人はそうではなくて、社会人一年目ですでに「仕事がしんどい」と言っている子もいました。自分のなかに、誰かの人生を豊かにできることをしたいなという気持ちが漠然とあって、就職活動ではいろいろな業種を受けました。自己分析していくなかで、「働く」ことが強い軸になっていることに気づいて、そのつながりでいまの会社にいるんだと思います。

――働くのが好きな理由はどんなところにあるんだろう？

FCで教わった「本気は楽しい」というところです。体に染みついているんだと思います。「適当にこなす」ことはできなくて。一生懸命やって、結果がついてきた経験が多いのは、報われていると思います。

――窪田さんは仕事を楽しんでいるし、幸せそうだよね！　仕事で人事も担当していると聞いたけれど、人事の目線で、いいなって思うのはどんな人？

「思考できる体力」があるか、自分で考えて動けるかどうかは意識して見ているかなと思います。

――なるほど。最後に、社会人として大事なことは、何だと思う？

二つあって、一つは「点で考えない」ことです。自分がやっている作業の前後にだれがいて、何をやっているのかということは常に意識しています。もう一つは、「素直であり、やったままにしない」こと。「裁量権」という言葉をよく耳にしますが、自分がやりたいままにできることだけではなくて、先人たちの知恵があるので、そこをまずはやってみるという素直さが大事だと思っています。そのあとに、「うまくいったのか」「改善点は何なのか」などを、考え抜くことが大事かなと思います。

――学習面でも、素直な子は伸びるんだよね。勉強への向き合い方は、大人になってそういうところに表れるんだね。「点」が「線」としてつながったよ。今日はありがとう！

タカタコラム　川岡びたみん未歩

名古屋市緑区育ち。その名の通り公園がたくさんあって緑地があふれていました。そのなかでも大高緑地は家からも近く、何かあると家族でピクニックへ行っていました。春の満開の桜は見事で人もいっぱいでした。公園のなかには池もありそこが大好きでした。アヒルのボートに乗って全速力で漕いでいると、なじみのボート屋のおじちゃんに「速い速い速い！」と叱られるのでした。

花まるの教室長を紹介します！

Hanamaru Family

花まるファミリー

サマースクールや雪国スクールで会おうね！

…花まるAll Inclusive School　FC…スクールＦＣ
…花まるオンライン　…算数脳ラボ　…Hanaspo

みんなの教室長も順番に紹介するよ。お楽しみに！



新井 征太郎

東京都



砂金 幹太郎

千葉・茨城　千葉県



伊原 健太

関西　大阪府



坂口 徹

熊本県



鈴木 和明

関西　静岡県



豊田 元

神奈川南　大阪府



中山 翔太

埼玉県



橋本 一馬

神奈川北　神奈川南　埼玉県



深谷 春陽

東京西　埼玉県



前原 匡樹

鹿児島県



宮嵜 香純

埼玉　東京都



高濱 正伸

リーダーネーム
名前
○○○　熊本県
出身地
担当エリア・部門

タカタコ

全国の花まる教室長、約150人をまるっと一年かけて高濱が直接インタビュー！　高濱による他己紹介「タカタコ」で、みなさんの教室長を紹介します。今年は「私のふるさと」をテーマに、教室長一人ひとりを深掘りしちゃいます。
サマースクールや雪国スクールで会ったリーダーたちも探してみてくださいね！



タカタコ 坪田シャーク充生

保育園までは東京都目黒区にいたのですが、小学校入学とともに立川市へ引っ越しました。東大和市と隣接する、緑地の多い場所でした。玉川上水の用水路や舗道、木々が生い茂るところで、毎日のようにカブトムシやクワガタを捕りました。ある日みんなで行ったら、友人が大きなヒラタクワガタを発見し、大騒ぎ。「おめでとう！」という気持ちと「嗚呼、自分が先にあそこを覗いていれば」という後悔がありました。